
魔王の俺VS勇者な幼馴染！？

天然バカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の俺VS勇者な幼馴染！？

【Nコード】

N9256Y

【作者名】

天然バカ

【あらすじ】

ある日。俺は幼馴染とともに異世界へと召喚された。もちろん、幼馴染は勇者になるけど……俺魔王って！？　もしかなくても俺、あいつらに倒されちゃうの！？

*主人公は最初から最強です。ご都合主義です。しかも処女作です。それでも大丈夫という方だけ読んでくれたら、嬉しいです。

第1話 はじまり（前書き）

最初からいろんなのつめたら早くもグダりました。
やはり小説書くのは難しいですね。

第1話 はじまり

俺は高校2年の影星 桐也。

成績等の友人からの総合評価は「死ね。チート野郎」などと言う不本意極まりない評価をうけている。

ルックスについては初めて会う人には必ず言われる一言。「綺麗なお嬢さんですね。」

……、男で悪かったですねえ！人を見た目で判断すんじゃないよ！
！世の中は理不尽だよつ！！

ーと、感傷に浸るのはここまでにしてつと、

家族は義父、義母、義姉、義兄の4人……いや、俺を合わせると5人家族だ。字を見て分かと思うが、俺は影星家と血はつながっていない。俺の本当の家族は、俺が3歳の時にとある事故で死んでしまった。それからすぐ後に俺は外国へ飛んでしまっただが、それはまた別の話だろう。とにかく、去年の春にここに帰ってきたら影星家の養子になっていたというわけだ。しかもなぜか俺は影星家の家族にめっちゃめっちゃ気に入られている。義姉と義兄の2人には格闘術や剣術、柔道等を教えてもらった。ちなみに影星家はなんかの道場を開いてるわけではなく、義姉と義兄の2人がアニメやライトノベルに影響された結果らしい。うん、その辺はつつこまないでくれ。俺だって我慢してるんだぞ？ほらあれだ、あれ。感受性がゆたかなんだよ義姉さんと義兄さんは！

とりあえず、俺ー影星桐也ーはそんな人間だ。そしてそんな俺の周りには変な奴も居る。

変とは、一（変態とか変人もあるが）チートすぎて変なのだ。

「桐也あゝ。待ってえゝ！！」

そんな風に叫びながらこっちに走って来るのが、変な奴その1。

幼馴染の星野 未良^{みらい}。

成績優秀、容姿端麗、スポーツ万能、学校におけるカリスマ的人気
etc……

人間、どういう生活したらこんな完璧超人が出来上がるのか不思議で不思議でしょうがない。しかも、未良の両親が、日本人とイギリス人だから立派なハーフなのだ。あと、見事なまでの金髪碧眼。すごすぎるぜ……。だが未良は、

「あつ……。小さなかわいい男の子」

「えっ！？どこどこっ！？どこに居んの桐也っ！！」

生粋のショタコンなのでした。マジで残念すぎる。ショタコンがなければ文句なしの超絶美少女なのに……

しかもまだ見つけてないし……。しかたないから、男の子が居る場所を指差して教えてやる。

「ほら、あそこの病院の入り口近くに居んだろ？」

「あつ！！本当だあ……。お人形さんみたいでかわいい男の子が居るう……。将来、桐也見たいに綺麗に育つ可能性大だね。」

「もしもし……。喧嘩売ってますか未良さくん？俺買っちゃうよ？」

「あはははは……。もう、冗談だよ桐也。そんなに怒らないでよ。」

そう言つて未良は俺に向日葵のような笑顔を向けてきた。……ハア、内心だけで溜息をつく。

そんな笑顔されたら怒れないつつうんだよ。というかこんな笑顔も未良の人気の1つなんだろうな。

などアホなことを考えていた俺の頭に”ゴツ”と鈍く黒く輝くものがあてられた。

「動くぞと撃つぞ。」

少し低めでドスの利いた声で脅してくる男が1人。だが俺も未良も慌てず騒がず、というか寧ろ呆れた態度で男に話しかける。

「祐馬。いくらモデルガンでも人に向けんな。気分が悪い。」

「そうだよ祐馬。モデルガンじゃ雰囲気全然たらないよっ！」

「「つつこむとこ、そこ！？」」

「桐也のは分かるよっ！うん。ごめん。だけど、まさか未良が重要

なのって雰囲気なの!？」

「ええ!？違うのっ!？？だって、桐也がつっこんだのってそこでしょ？」

「全然違えよっ!!!!!」

「まっ。そんなつつこみなんて置いといて」「おいていいのかつ？」

「、本当に危ないから人に向けないでね祐馬」

祐馬は面食らった様子で「ごめん」だけを言う。ほんとに祐馬がかわいそうだ。

てか、いまさらだけど祐馬が変な奴その2。フルネームだと、赤霧祐馬。

未良と同じで完璧超人だが、祐馬は超がつくほどのガンマニアだ。見ての通り、学校にまでモデルガンを持って来るほどのだ。しかも、祐馬の家には地下があるんだが、その地下部分が全てモデルガンによってうめつくされている。さらには、銃をきちんと扱うために毎日、筋トレと射撃練習をしている。もう、呆れて何もいえなくなるってもんだ。

「とゆうかさ、別に桐也以外に向けたことないし、桐也なら本当にぶっぱなしても平気だろ？」

「だからなんだ。それで、人に向けていいことにはならないし、なにより俺がめんどい。」

「あっ。本音漏らした。」

「なんかいった？未良？」

「うっん。なんでもない。ってか桐也。顔が怖いよ？本当になんでもないから、その黒い顔やめよ」

言いながらも未良の目は泣く寸前だった。俺の顔ってそんなにこわかったのか？

ちよつと傷ついたおれであった。

「悪かったな。ごめん。」

未良の頭をなでる。そうすると、未良の機嫌は見る見るうちによくなったのでてを離れた。

なんか未良が名残惜しそうに見ているのは、気のせいだろう。

「3人とも……立ち止まってる……邪魔。」

こちらに声を掛けながら歩いてきた女の子が変な奴その3。鏡咲^{かがみ}
さきあるか

明留香。

明留香も完璧超人で、未良が欧米系なのに対して明留香は腰まで伸ばしたさらさらな髪に、透き通るほどの漆黒の瞳というこれぞ日本人という感じの美少女だ。

加えて言えば、明留香は全国模試で毎回トップの天才児だ。だが明留香は

「明留香をまつてたんだよ〜もう、明留香は鈍感だよ〜」

「そう。……待たして……ごめんなさい。」

「はあ。明留香あー、ここってつつこむとこなんだよ？まあ、素直なのはかわいいからいいけど。」

「わかった。……今度から気をつける。」

「うーん。……まあ、かわいいから許すっ!!」

明留香の頭をなでなでする未良。気分はお姉さんか。

とまあ、見て分かれるとおり明留香は無表情&無口で引っ込み思案な女の子なのである。

とゆうか、俺の周りには残念な奴しかいなくね？なんで？

1人途方に暮れるおれであった。

「ふえっ!?!」「なんだあ!?!」「……何?」

隣から皆の焦った声が聞こえてきた。見ると未良と祐馬の足元に光る黄金色の魔法人が。

あっ!!ゲームとかでよく見るあれかあ………ってはあ!?

「なっ!ちよっ!?!お前ら何してんの!?!」

「うちに聞かないでっ!てか、桐也の足元にだってあんじゃん!」

「でも、俺らと色違くない?」

2人に言われて初めてきずいた。確かに俺の足元にも魔法人があっ

た。だが、俺の魔法人は２人とは違い黒く輝いている。よく見れば、明留香の足元にも俺と同じく黒く輝く魔法人があった。

「なんだ……これ？」

[illegible]

思わず呟いたが、皆も分かる分けがなかったただ、混乱していた。そして、未良と祐馬の魔法陣が光り輝き、俺と明留香の魔法人は黒く輝いて…。

- 直後、視界の全てが黒く染まった。

視界が復活していく。

周りは見たこともない暗い場所。足元には黒い光が収まっていく魔法人の上。

隣を見れば、明留香が倒れていた。どうやら氣を失っているようだ。正面を見れば、10歳くらいの女の子が俺達を見ている。そして、女の子以外にも俺達を囲むように幾人もの目。だが、それだけならまだしも、女の子も幾人の目も全てが、俺らの世界では見られない赤い、紅い瞳。

そのことを確認したとたんもうあの”日常”とはおさらばなのだ
と直感的に分かった。

ああ、まだ見ていないアニメあったのになあ。

* * * * *

side 祐馬

気がつけば、光が収まっていく魔法人の上。

隣には未良が居るけど、桐也と明留香の姿はなく、そのかわりに変な服を着た女の子が居る。女の子の周りにも魔術師(?) っぽい人達が俺たちを囲むようにたっている。

……これってあれ？異世界というやつかなあ

あゝあ。さよならマイワールド。こんにちはニューワールド。

* * * * *

side とある天使

そして少女達の幕があがる。

舞台に立つ彼らは知らない。どう転んでも”happy end”

”なんて彼らにはないのだと…。

この舞台に立つ神は知らない。神の定めた道筋なんて、崩れやすいものだということを…。

この舞台に立つとある少女は知らない。自分が……などではないことを…。

最後に……

私には分からない。私はどうすれば……に会えるのかを…。

それでも幕は上がってしまった。ならば、

「……………」

その言葉は闇にまぎれて聞こえなかった。

* * * * *

s i d e 語り手

運命なんて本当にあるのだろうか？

それは誰にも分からない。でもだからこそ彼らは足掻きつづける。

果たして彼らはうまくhappy endになれるかな？

なれるといいね。

第1話 はじまり（後書き）

楽しんでもらえたら嬉しいです。
感想とか、意見とかあつたら教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9256y/>

魔王の俺VS勇者な幼馴染！？

2011年11月27日18時47分発行